



図1 印花人物文阿蘭陀焼手付水指 徳川美術館所蔵



図2 印花人物文阿蘭陀焼手付水指
貴婦人像貼付文部分



図3 印花人物文阿蘭陀焼手付水指
ロータス文印花文部分

徳川美術館所蔵ドイツ製塩釉灰色藍彩炔器「印花人物文阿蘭陀焼手付水指」

——大名道具の「阿蘭陀」としての視座から——

長久智子

はじめに

一 先行研究

二 尾張徳川家伝来「印花人物文阿蘭陀焼手付水指」

(一) 法量及び附

(二) 技法

(三) 装飾

(四) 墨書銘、貼札及び蔵帳

(五) 尾張家十二代徳川齊荘との関係

(六) 製作地及び製作年代

三 大名家のドイツ製塩釉藍彩炔器

(一) 富山藩江戸藩邸(上屋敷)跡(東京大学本郷キャンパス)からの出土品例

(二) 柳川藩立花家の伝世作例

(三) 「堀田相模守より拝領」と伝わる伝世作例

むすび

はじめに

徳川美術館が所蔵する「印花人物文阿蘭陀焼手付水指」(以降「本作品」と略称する)は、高三〇㌢に迫る大型のドイツ製ビール飲用器で、知られる限り国内にまったく類品のない作品である。しかしこれまでのところ、本作品に具体的に言及または検討した論はほとんどない。そこで本稿は、舶載例が極めて少ないドイツ製塩釉灰色藍彩炔器の重要な伝世作例として、この尾張徳川家伝来「阿蘭陀焼」手付水指を取りあげ、製作地・製作年代を考察した上で、大名道具の中の「阿蘭陀」としての視座から位置づけを試みる。

「阿蘭陀焼」⁽¹⁾とは、江戸時代に日蘭貿易を通じて日本へ舶載されたヨーロッパ製陶器を指す、江戸時代からの分類名称で、これらヨーロッパ製陶器が納められた箱や用いられた茶会記、また蔵帳などにこの表記をみることができ⁽²⁾る。「阿蘭陀焼」として近世日本に舶載された製品は、(一)錫白

釉藍彩／錫白釉色絵陶器（ファイアンス陶器、^③オランダ製、一部はインゲランド製か）、（二）塩釉褐色炔器・茶褐色の化粧土を施したのち焼成中に窯内に塩を投げ入れることで釉薬となす／塩釉灰色藍彩炔器・茶褐色の化粧土は用いず、白色の胎土で成形し、コバルト彩（藍彩）を施したのち焼成中に窯内に塩を投げ入れることで釉薬となす（ストーンウェア、ドイツ製）、（三）銅版転写染付／色絵陶器（クリームウェア製^④プリントウェア、オランダ製、インゲランド製、フランス製など）の三種類に大別できる。本稿で検討する尾張徳川家伝来の「阿蘭陀焼」手付水指はこの内の（二）塩釉灰色藍彩炔器に該当する作品である。またこれら「阿蘭陀焼」のうち、茶道具に転用された製品の多くは（一）ファイアンス陶器で、特にオランダ・デルフト窯製の錫白釉藍彩／藍彩上絵のアルバレッロ^⑤は日本で水指に転用されて、出土例、伝世例ともによく知られている。しかし本作品のような江戸時代に舶載され、伝世したと確実視できるドイツ製塩釉灰色藍彩炔器は、管見の限りわずか四件にとどまっており、^⑤日本国内ではほとんど流通しなかった稀少な製品であったことがわかる。つまり、本作品はすでに舶載当時から珍しい種類の「阿蘭陀焼」であり、また後述するように尾張徳川家の蔵帳類中に「阿蘭陀」と称する道具がほとんどないところからみても、尾張徳川家にあっても異質な渡りの道具に映ったであろうことは想像に難くない。

先に述べたとおり、これまでの「阿蘭陀焼」に関する研究は伝世・出土例の量と比例してデルフト窯製ファイアンス陶器や幕末のプリントウェアに集中しており、ドイツ製炔器が「阿蘭陀焼」の中で明確に位置づけられたことは皆無と云ってよい状況にある。「阿蘭陀焼」がひとつの分野として認知されるようになってからおよそ三十年経った今日、出土作例と伝世作例を併せ、また近世舶載工芸品なども併せみた上での舶載ヨーロッパ

陶器の体系的考察は、いまだスタート地点に立ったばかりであるといえる。その意味でも本作品は今後一層十分に検討され活用されるべき資料である。

本稿は、まず本作品の作品分析を行い、関連する出土・伝世の大名家旧蔵作例について検討を加えてゆくことにする。

一 先行研究

本稿に直接関わる先行研究には主に以下の論がある。^⑥

ドイツ製炔器（別称「ライン炔器」とも）について David Gainster（*ドイツ・ゲイムスター*）氏がその大著 *German Stoneware 1200-1900: Archeology and Cultural History*. The Trustee of the British Museum, London, 1997 で、大英博物館、ヴィクトリア&アルバート・ミュージアム（ロンドン、以下「V&A」と略称）、ロンドン美術館所蔵品を中心に豊富な資料を交えながら製作技術、窯構造、欧米各地の出土品、各製作地の製品の特徴と年代、販路等を詳細に説いて、草創期から近代まで八百年に及ぶドイツ製炔器の全体像を描き出しており、欧米においてドイツ製炔器の基本研究となっている。

一方、日本に舶載されたドイツ製炔器について Tys Volker（*タイス・フォルカー*）氏の *Porcelain and the Dutch East India Company: as recorded in the Dagh-Registers of Batavia Castle, those of Hirado and Deshima and other contemporary papers 1602-82*, Rijksmuseum voor Volkenkunde, Leiden, 1954 は、オランダ東インド会社の文書から陶磁器に関係する部分を抜粋・英訳して検討を加えており、日蘭陶磁貿易を考えるための基本文

献である。この中には日本側からのドイツ製炔器と思しき陶磁器の注文に関する記事をみることができる。西田宏子氏は「茶陶の阿蘭陀」(展覧会図録『阿蘭陀』 根津美術館 一九八七年十月)で、フォルカー一九五四に記載のオランダ東インド会社の記録を引用し、幕府高官らによる、ドイツ製炔器を含むヨーロッパ製陶器注文に触れた。しかし、西田氏が論じた注文主の特定にあたっては論議がある。すなわち一六四〇年十二月三十日(寛永十七年十一月十八日)⁽⁷⁾に「stone-baked」(とVolker氏が英訳した)陶器を注文したLord Cangadonneという高官について、これをフォルカー氏は加賀藩主としての「加賀殿」と解釈したが、西田氏は堀田加賀守正盛であると論じた。⁽⁸⁾今日でもこの「加賀殿」が加賀藩主であるのか、堀田加賀守を指すのか、論は分かれている。

櫻庭美咲氏は「江戸時代に舶載されたライン炔器製酒器についての一試論」(『武蔵野美術大学研究紀要』第三十号 一九九九年三月)でゲイムスター一九九七からの引用を中心にドイツ製炔器の概要を述べ、また西田一九八七が述べた幕府高官とオランダ商館との取引を援用しながら、ドイツ製炔器の舶載状況をまとめている。

出土品についてはヨーロッパ製陶器集成として松崎亜砂子氏「日本出土のヨーロッパ陶磁器」(『掘り出された都市 日蘭出土資料の比較から』 日外アソシエーツ 二〇〇二年九月)、また山口美由紀氏「日本出土のヨーロッパ陶磁」(『陶磁器流通の考古学』 アジア考古学四学会編 高志書院 二〇一三年十一月)が出島和蘭商館跡出土品を含め近年までの出土品情報を整理している。また堀内秀樹氏・金田明美氏による「『陶磁の道』以降のアジアヨーロッパ間の陶磁器研究と流通研究への視点」(『東洋陶磁』四十五号 東洋陶磁学会 二〇一六年三月)は流通と消費の視点から、近世における日本とヨーロッパ

ロッパ諸国の陶磁器流通およびヨーロッパの都市部出土資料や沈船資料、研究史上の課題についてまとめている。

先行研究は以上のようにドイツ製炔器のおおよその流通を追うことができていたが、伝世・出土する作例を個別に分析した論は櫻庭一九九九が若干試みた以外にはなく、概論の段階に留まっている。本稿はこれら先行研究を踏まえながら論を進めることとする。

二 尾張徳川家伝来「印花人物文阿蘭陀焼手付水指」

(一) 法量及び附

法量

高二九・八糎 口径一二・三糎 底径一五・〇糎 【図1】

附

黒漆蓋一枚、箱(二方棧、桐)一箱

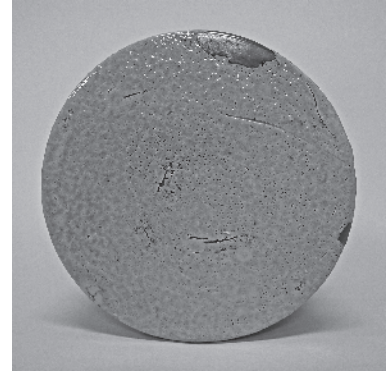
(二) 技法

鉄分ほとんど含まれない白色土を用いた、胴部中央をやや内側に絞った轆轤成形の円筒形で、内面には左回転の轆轤成形痕が残されたままになっている。先を渦状に巻き込んだ手捻りの把手を一つ、胴上部に付ける。また型成形の貼付文および印花文(スタンプ文)を胴部に施す。底部は板起こしの後、剥ぎ痕を丁寧に均した平底とする【挿図1】。本作品は底部も含めた全面に塩釉が掛かっており、また口縁上部の一部に釉剥離がみられること、胴上部の藍彩(コバルト彩)が口縁方向へ流れていることから、伏せ焼きされた製品とみる⁽⁹⁾【挿図2】。塩釉は底部においてはやや灰色が

かつて発色するが、胴部ではよく熔けて濁りのない透明色を呈する。総体コバルト彩の藍色は白色に焼きあがった素地の上に発色良く乗っており、一部に小さな当たり傷のあるのみの上質な完形品である。なお内面の底部と側面の繋ぎ部分の焼成時に生じた隙間（窯割れ）は日本において漆留めしている。本作品には黒漆塗蓋が添い、またこのように底部内面の窯割れを丁寧に黒漆で留めていることから、細水指ほしみさしの類として実用に供されたか、あるいはそのように意図されていたことが明らかである⁽¹⁰⁾。

(三) 装飾

口縁部からやや下部に一条の稜線を廻らし、さらに胴部中央を囲むように上下三条ずつ縄目状の稜線を廻らせる。胴部中央には主装飾として三方向に置かれた三枚の貼付文がある【図2】。やや楕円形の貼付文は二重になっており、周縁部を装飾枠として、中央部には半円形に広がる豪華なヘッド・ピースと丸珠ネックスが特徴的な正面向きの婦人像を配する。



挿図1 印花人物文阿蘭陀焼手付水指 底部



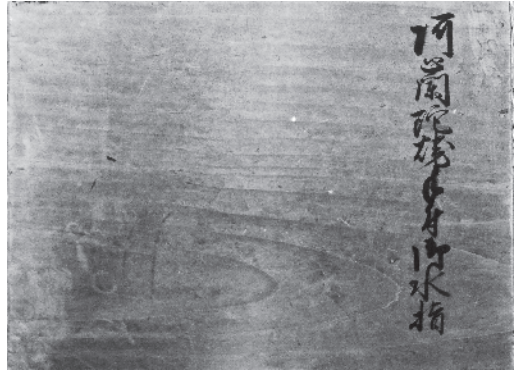
挿図2 印花人物文阿蘭陀焼手付水指 口縁部(コバルト彩の流れ)

ヘッド・ピースを着けた貴婦人の風俗は、当時の陶磁器装飾の常として、流行していた何らかの平面作品—銅版画、木版画を手本としているのは確かであるが、ここで原画を指摘することは難しい。但し、十五世紀中期から十六世紀中期にかけてドイツ、ネーデルラント絵画に大型のヘッド・ピースを着ける貴婦人の姿をみることができるところから、図像の源泉をこの地域・時代に求めるのが適切であろう⁽¹¹⁾。この貴婦人像の周囲を取り囲んで広がる装飾枠は上部に獅子文を配し、余白は触角を持つ奇妙な線状虫で充填して、ルネッサンス期（十六世紀中期）のグロテスク文風とする⁽¹²⁾。胴部三方向の貼付文の間隙には、上下からハート状のロータス文を三つ組み合わせる矢先形の装飾を印花文で表現する【図3】。藍彩は縄目状の稜線の間、および中央の文様帯の背景部分に施す。

(四) 墨書銘、貼札及び藏帳

箱蓋の表に「阿蘭陀焼手付御水指」と墨書がある【挿図3】。また蓋裏には「(○)に「納」印」拾八番「(朱)天／水指／(墨)拾三號」と墨書のある紙札二枚を貼る。

一方、十九世紀における尾張徳川家・御数寄道具の移動・登録替えを記録した帳である「御数寄屋方御道具帳 御茶器御道具 三(二)什器旧原簿一」には「(朱書)に五／(墨)一 阿蘭陀焼手付御水指 壺／縦箱入浅黄絹綿入袋入／丸之内ニ人物上下ニ筋彫有之／蓋黒塗／損繕并底ニヘケ有／(以下朱書)天保十五辰二月 御側江差上候／於江戸御戻之上嘉永元申三月尾州江為御差登／右納判 十八番江組入」とあり、本作品と特徴・整理番号とも一致する。なおこれ以前に遡りうる本作品に関係する文書史料は今のところ見当たらない。さてこの帳の記述から、本作品は少なくとも天保十五年



挿図3 印花人物文阿蘭陀焼手付水指 箱蓋表 墨書

(二八四四)二月にはすでに尾張徳川家の御数寄屋方道具になっていたこと、この時「表道具」(藩の公用品)から当主の身近に置く「側道具」(当主の私物)に登録替えを行なったこと、江戸藩邸において再び「表道具」に登録替えされたのち、嘉永元年(一八四八)三月に名古屋へ戻されたということが確認できる。この一連の出来事が起きた時期に在職していた当主は、十二代徳川齊荘(在職・天保十年(一八三九)～弘化二年(一八四五))及び十三代徳川慶(在職・弘化二年(一八四五)～嘉永二年(一八四九))である。つまりこの二人の当主の在職期間中に、本作品は江戸もしくは名古屋で側道具に登録替えされ、再び表道具へ登録された後、齊荘の死後、慶の在職中に江戸から本来の管理地である名古屋へ戻されたことになる。

(五)尾張家十二代徳川齊荘との関係

帳の記述から、本作品は十二代齊荘の側道具となった時期があることが分かった。特筆すべきは、齊荘が尾張徳川家には珍しい茶人大名であったことである。そもそも尾張徳川家は近世大名諸家中最高の家格を誇る大名であり、またその格にふさわしく、藩祖・徳川義直が父である天下人・徳川家康より分配されて以来、世上に知られた名物道具を多数所持してい

た。数寄道具も同じく家康以来の名物揃いで知られ、『玩貨名物記』(著者不明、万治三年(二六六〇)刊行)では「尾張様」が徳川將軍家に次ぐ数量の名物茶の湯道具を所持していたと分かる。これらの名物道具は私事の茶の湯に用いるのではなく、御成をはじめ公の場での接待に用いられる道具であった。そして、これらの道具を所持した初代義直はじめ代々の当主たちが、儀礼上必要な知識としての傾倒で、つまりのめり込みすぎることなく茶の湯に接していたのに対し、齊荘は役目以上の熱意をもって茶の湯に接したのであった。この齊荘と茶の湯の関わりについてはすでに佐藤豊三氏が詳細に論じているので、これを援用してこの項を考察したい。齊荘は文化七年(二八一〇)十一代將軍徳川家斉の第十二子として江戸城内で生まれ、四歳の時、御三卿・田安德川家三代齊匡(家斉の異母弟)の養子となる。その後、天保八年(二八三七)に田安德川家の四代目当主となったものの、天保十年に十二代將軍家慶の命で、尾張徳川家十二代となった。齊荘は翌年、尾張に初めて入国し、四十日滞在の後、再び江戸へ出府する。天保十四年再び尾張へ入国し、翌天保十五年二月再び出府した。なおこの年十二月二日をもって「弘化」に改元されている。弘化二年(一八四五)三月、田安德川家齊匡の第十子鑑丸(同年八月家督相続、尾張徳川家十三代慶)を養子にし、七月に三十六歳で江戸にて薨去した。齊荘は文政五年(二八二二)、十三歳で「知止齋」と号して若年の頃から茶の湯、書画に親しんでおり、裏千家十一代玄々斎宗室(一八一〇～一八七七)とも親しく交流を持った。天保十一年には玄々斎から茶の湯秘伝書を伝授されている。このような齊荘の茶の湯への傾倒ぶりはもはや大名の嗜みを超え、尾張徳川家代々当主中で唯ひとり茶人大名と評される所以となった。

さて、本作品の移動についての記録が残る前出の「御数寄屋方御道具帳

御茶器御道具 三」には、天保十一年三月に「江戸江御差下」、天保十五年二月に「江戸江御為御持」した道具が数多く見られることを新たに指摘したい。¹⁴例えば「御分物／御名物／一 あかねや茄子御茶入／（朱字）天保十一年三月江戸江御差下／弘化四未三月尾州江為御差登」とあるのは「漢作茄子茶入 銘 茜屋 大名物」が天保十一年に江戸へ運ばれた記述であるし、「権現様御譲／御名物／一 大高麗御茶碗 荒木攝津守所持／（朱字）天保十五辰二月江戸江御持セ／弘化四未三月尾州江為御差登」とあるのは、「井戸茶碗 銘 大高麗 大名物」が天保十五年に江戸へ運ばれた記述である。この帳に拠れば、ほか多数の「御分物」「御譲」「御名物」道具が天保十一年および十五年に名古屋から江戸へ運ばれているのである。この大移動は二度とも斉荘が名古屋から出府する時期と重なっている。持ち出しの理由について佐藤二〇〇三では、天保十一年の道具運び出しは、天保十四年（一八四三）三月九日に行われた將軍徳川家慶の尾張徳川家江戸藩邸・戸山屋敷「御通拔」という一大行事での飾り道具とするためではないかと論じているのだが、やはり三年も前に大切な道具類を名古屋から江戸へ大量に持ち出すことは準備としては早すぎると考える。名古屋から江戸への道具の移動については、この天保十四年「御通拔」に遡ること、寛政五年（二七九三）三月二十三日に行われた將軍家斉による御成に関する記録「和田戸山御成記」（寛政五年）に、「（前略）けふの御もてなしの御調度とはミナ御宝にて尾張／国よりはこひもて来りしものなるか程もなく築地の御屋敷なる御蔵へはこひ行て舟よそおひし尾張国の御宝蔵／へ送りかりそめに造られし御調度ひとつとして／のこし給はすみな御宝の数に入られたるよし聞傳えし（後略）」とあり、江戸での用が済めば、速やかに蔵屋敷へ運び、蔵屋敷内に設けた船着場から海路名古屋へ道具を運び返した様子が知

られるのである。¹⁵この帳の記録によると、斉荘治世中に名古屋から江戸へ移された道具は斉荘の死後、つまり斉荘の御用が済んだ弘化四年三月に名古屋へ戻されている。斉荘が二度にわたって江戸へ運んだ「御名物」を多数含む道具は、「御成」「御通拔」といった江戸藩邸での公式行事を想定しての事前準備ではなく、斉荘の茶の湯熱が高じての、個人的な、しかも恐らく異例の指示として江戸へ運ばれたようにみえるのである。¹⁶

帳の記録と当時の背景を鑑みると、本作品が尾張徳川家にいつ入ったのかは不明である。十九世紀の帳が初出であるから、蔵の中で長らく存在を忘れられた道具だったと思われるが、將軍家斉の実子として思いのまま茶の湯道楽に没頭していた十二代斉荘によって、あるいは師であり友であり、茶の湯道具選別の「目」であった玄々斎とともに見出され、斉荘の二度目の出府に従って側道具として運ばれ、その後、さらに公式行事にも耐えうる表道具に格上げされたのであった。本作品は、玄人跣の茶人・斉荘によって御家伝来の「御名物」たちと対等の価値を与えられた道具といえる。

（六）製作地および製作年代

次に本作品の製作地および製作年代について検討する。本作品は、全く同じ貼付文を持つドイツ製炔器のビール飲用器（タンカード）^{タンカード} [英] (Humpen [独]) が、V&Aに所蔵されていることが、今回判明した。このV&A所蔵タンカード（登録番号：19001865）【挿図4】は、高二六・八㎝、口径七・〇㎝、底径九・四㎝、把手を含む幅一〇・五㎝の細長い円筒形で、本作品よりはやや小さいものの、同種の製品である。当初の把手は欠損し、金属製把手を後補しているほか状態は良好である。胴上部に幅の細太まちまちに八条



挿図4 塩釉灰色藍彩炆器タンカード
ヴィクトリア&アルバート・
ミュージアム(ロンドン)所蔵
©Victoria & Albert Museum,
London



挿図5 塩釉灰色藍彩炆器タンカード
正面紀年銘貼付文部分
©Victoria & Albert Museum, London

の稜線を、また下部に四本の稜線を廻らせる。胴部中央、把手と相對する正面方向に楕円形の貼付文を一枚、またその両側面に上下二枚の楕円形の貼付文を、またそれらの主貼付文の間隙に小花形の貼付文を十枚配する。

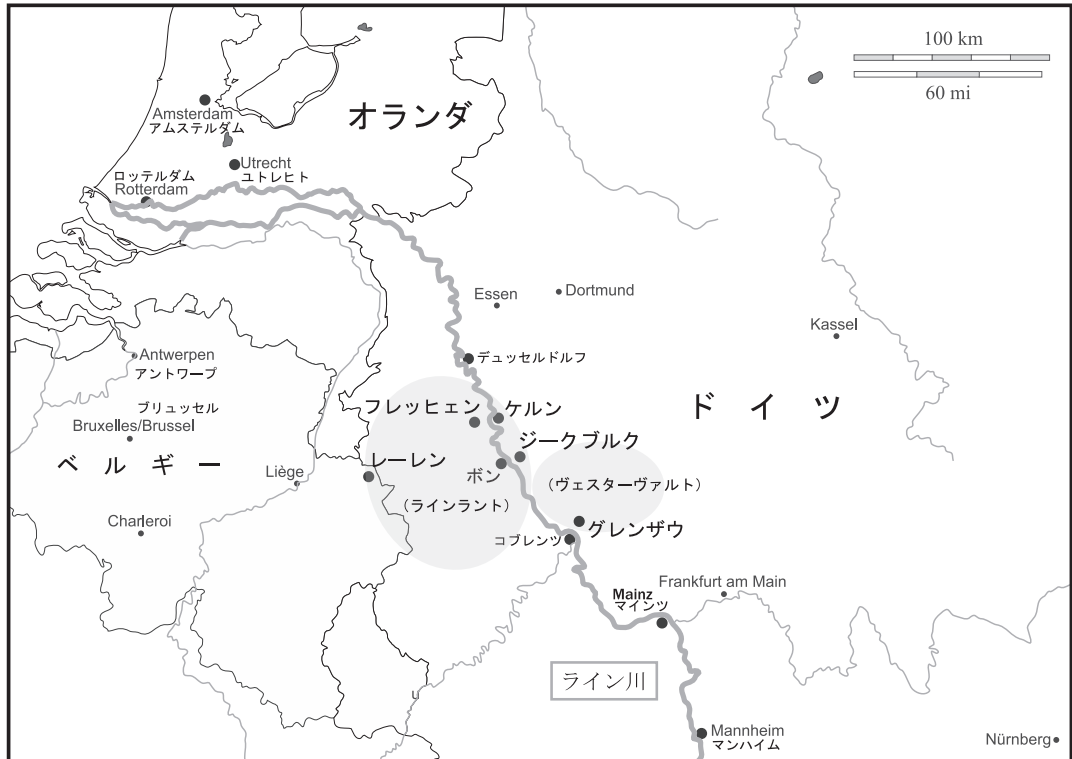
徳川美術館所蔵ドイツ製塩釉灰色藍彩炆器「印花人物文阿蘭陀焼手付水指」

また、ローレル葉で枠取りし、上部に側面觀の馬頭部と「1594」の数字、その下に唐草状のカルトゥーシュに囲まれた楕文の貼付文が胴部正面にあり、この貼付文中に騎乗する騎士と「E」の文字がデザインされる【挿図5】。「1594」は紛れなく製作年であり、「E」はこれを製作した工房のマスター Jan Emens Mennicken の頭文字である。陶工メンニッケン一族はドイツ・ルネッサンス時代に名を興し、ラインラント地方のジークブルクの西、Raeren (現ベルギー) で活躍し、一五九〇年代には財政的な理由によって Westervald 地方の都市 Koblenz の北に位置する Grenzau に移って活動していたとみられている【地図1】。ザクセンの Harz 山地から産出するコバルトを微細なガラス粉と混ぜた顔料「smalt」^{スマルト}を用いて、化粧土を施さない灰色土に藍彩を施したいわゆる塩釉灰色藍彩炆器は、ヤン・エメンズ・メンニッケンが一五八〇年代にレーレン窯で発展させた技術とされており、ヴェスターヴァルトに移ってからこの技術を用い、鉄分の多い化粧土を用いた従来の茶褐色の塩釉炆器を駆逐してヴェスターヴァルトの炆器の主流となっている¹⁷⁾。

V&A 所蔵タンカードの胴部側面の貼付文【挿図6】は、本作品の貼付文の貴婦人像部分と全く同一であり、すなわちこの二作品が同じ工房製であることを示している。なお、V&A 所蔵作品に施された小花形の貼付文は、同じくヴェスターヴァルトのグレンザウにあった Johannes Kalb の工房に帰属されるデザインであることが分かっており、カルブ工房がこの頃ヤン・エメンズ・メンニッケンの工房と協働していたことが推測されている。このカルブ工房の活動時期の下限は一六二〇年代までと現在考えられており、例えば古い装飾型を使い回す¹⁸⁾ことをすれば、V&A 所蔵作品の製作年代は上限一五九四年、下限一六二〇年代とみることもできるとい

地図1 ドイツ炔器の主な製作地

*Gaimster 1997、Hinton 2012を基に筆者作成



徳川美術館所蔵ドイツ製塩釉灰色藍彩炔器「印花人物文阿蘭陀焼手付水指」

う。¹⁸但し、このV&A所蔵作品の正面に配された楕と紀年銘のある貼付文は、恐らくいずれかの名族や町の紋章であって、彼らの記念すべき年として年紀が入れられた特別注文品と見做してよい。よって、この作品の製作年は、貼付文にあるとおり、一五九四年と考えてよいだろう。

本作品とV&A所蔵タンカードに共通する貴婦人像デザインの貼付文はほかにフィラデルフィア美術館（アメリカ）に所蔵されていることも判明した【挿図7】。高二四・四厘、胴幅一三・〇厘のこの作品の胴部中央にも、衣装がやや簡略化され面貌も若干異なるように見受けられる貴婦人像貼付文があり、ここにも記されている「E」の頭文字から、本作品やV&A所蔵タンカード同様、ヴェスターヴァルトのヤン・エメンズ・メンニッケン工場の製作と知られる。なおその下の数字「90」は一五九〇年



挿図6 塩釉灰色藍彩炔器タンカード
貴婦人像貼付文部分
©Victoria & Albert Museum, London



挿図7 塩釉灰色藍彩炆器ジャグ
フィラデルフィア美術館所蔵

という年紀と思われる。また頸部に「H」[9]という頭文字と年紀があるとの報告があり、この製品は一五九〇年から一五九五年に製作されたと考えてよいだろう。⁽¹⁹⁾

このように同形式の貴婦人像貼付文を施すヤン・エメンス・メンニッケン工房の作例が存在することから、本作品の製作年代を一五九〇年代に、また製作地をドイツ・ヴェスターヴァルト地方、グレンザウのヤン・エメンス・メンニッケン工房と結論する。

三 大名家のドイツ製塩釉藍彩炆器

次に、ドイツで製作された本作品に類する炆器製品がどのような経路で日本へ舶載され、大名たちの手に渡り、伝世または出土したのかを考察したい。

徳川美術館所蔵ドイツ製塩釉灰色藍彩炆器「印花人物文阿蘭陀焼手付水指」

まず、陶磁器に関係するオランダ東インド会社関係史料（フォルカー一九五四）の中から、明らかにドイツ製炆器を指すであろう記事を抽出した。

(1) 一六五八年十一月三十日付、Boucheljonなる人物のレポート

「(前略) But if possible they should be made of Cologne or Syburch earth which tankards are made of.」(「可能であるならそれらの製品はコロニーユかジークブルク製のタンカードがよい」)

(2) 一六五八年十二月十四日付バタヴィアからアムステルダム分室へ

「(前略) some earthen and wooden models .. are demanded for the Emperor, Councillor of the Realm and other Great Ones, to be modelled and baked of Cologne or Sijburchse fine earth...」(「いくつかの陶器製・木製の模型(型)のとおり、皇帝(徳川将軍)、幕閣高官へのコロニーユかジークブルク製陶器(炆器)」)

(3) 一六六五年六月二十五日付

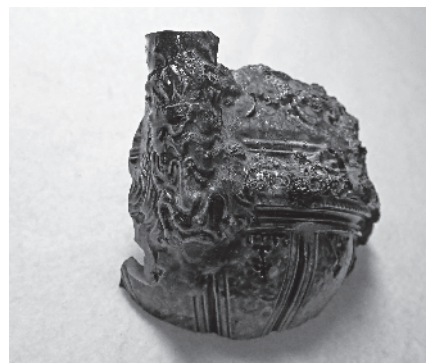
「the Councillor of the Realm, Minnosama* has the goods he had ordered.. two (small jugs) of Cologne stoneware.」(「幕閣高官にさだめられた二つのサマはコロニーユ製の注文品の小型ジャグを所持している」)

(*稲葉美濃守正則(一六二三―一六九六)、当時は老中職) (内・傍線は筆者)

これらの記事で言及されているCologne [英]、つまりドイツの都市Kölnは、ジークブルク(フツ)では蘭でSyburch / Sijburchse「ジークブルクの」と表記される)とともに、ラインラント地方の炆器製作の中心地として知られていた。西田一九八七によれば、ヨーロッパ製陶器が日本で商品となった記事の初見は一六三〇年三月九日付、商館員Coenraedt Cramerの日誌であ

る。「九日（前略）三百個の上等の陶器―大・中の盛皿、並皿、スープ皿、ソース入等からなる。これはエラスムス号の船長ランブレヒト・イエロニムスのもので、彼はこれを希望する日本人に売ろうと考えていたが、よい値段で売ることが出来なかった（後略）」⁽²⁰⁾。このように初めこそ日本人の関心を惹かなかったヨーロッパ製陶器であるが、ヨーロッパ人に日本人の好むかたちや材質が理解されてゆくと次第に状況は変わり、好んで入手しようとする日本人も現れてきた。以降一六六五年頃までが、記録で確かめることのできる日本へのヨーロッパ製陶器舶載のひとつのピークであり、これ以降は記録に残らない少量の私貿易品として取引されることとなる。西田一九八七が指摘するとおり一六三〇年代から一六六〇年代にかけてが日本にヨーロッパ陶器が舶載された一つのピークであるとみられることから、本作品や伝世・出土の類品もこの時期に舶載された製品である蓋然性が極めて高い。ドイツ製炔器がオランダやイングランド、北欧、「新天地」アメリカ大陸の入植地、台湾や日本まで運ばれた黄金時代は十七世紀中期であり、十八世紀に入ると新しいやきもの―ドイツ製磁器、イングランド製陶器の台頭に圧されて、グローバルな貿易陶磁としての時代は終焉を迎える⁽²¹⁾。もちろん十七世紀の製品が、十八世紀になってアンティーク商品という位置づけで持ち込まれた可能性も全く否定はできないものの、やはりまずは、ドイツ製炔器が日本へ舶載された時期については生産と流通の盛期であった十七世紀前期から中期に置くのが妥当であろう。

(二) 富山藩江戸藩邸(上屋敷)跡(東京大学本郷キャンパス)からの出土品例
それでは尾張徳川家以外、ほかの大名家にも同種のドイツ製炔器は入ってきたのだろうか。富山藩上屋敷跡の土坑から日本製のほか中国製・朝鮮



挿図8 東京大学本郷キャンパス(富山藩江戸藩邸)出土 ドイツ炔器片

以降は富山藩上屋敷の敷地に含まれたエリアである。炔器片が出土した採土坑SK309の覆い土の一部は焼土層であること、この下層から一六六〇～七〇年代の肥前磁器が出土したことから、藩邸も全焼した大火「天和の大火」(天和二年(一六八二))によって被災し、廃棄された陶器類と考えられている。出土したドイツ製炔器片は細長い注ぎ口の下部に獣面貼付文をあらわし、さらに胴下部に蓮弁文様の彫文と藍彩を施した、塩釉褐色炔器片⁽²²⁾ (二〇・三厘×八・三厘)である。本炔器片は櫻庭一九九九で指摘されているように⁽²³⁾、シュナベルカンネ(Schnabelkanne「独」)と呼ばれる細長い口を持つジャグの一部で、製作地は櫻庭一九九九が想定するレーレン窯または、本稿ではヴェスターヴァルト製の可能性も併せて指摘したい。本炔器片にみられる激しい被熱痕は天和の大火によると考えてよいことから、このジャグが一六八二年以前に舶載されていること、また類品のシュナベルカンの装飾形式から考えて十六世紀末期から十七世紀前期の製品と考えてよい。現存寸から考えると、当初は高三〇厘近い製品と予測できる。

半島製・オランダのデルフト窯製・トルコのイズニーク製といった外国陶磁器類陶片とともに、十七世紀ドイツ製炔器片【挿図8】の出土が報告されている⁽²⁴⁾。東京大学本郷キャンパス内、医学部附属病院の東端に位置するこの遺構は、寛永十六年(一六三九)以前は加賀藩前田家下屋敷の敷地内であり、それ

富山藩は、加賀藩の支藩として加賀前田家三代利常としつね（在職…慶長十年「二六〇五」～寛永十六年「二六三九」）が寛永十六年に第二子利次としつぐに十万石を与えて立藩させた。この富山藩上屋敷の遺構は先述のとおり寛永十六年以前は加賀藩邸として機能しており、罹災して廃棄された陶器類に茶道具が多く混じること、また富山藩関係の文献史料に利次が利常より貰い受けた茶道具が天和二年の大火で焼失した由が記されているとの指摘があり、炆器片とともに出土している中国・龍泉窯製青磁三足香炉や青磁算木文花生、建窯の天目といった茶道具は利次から分配の御道具であった可能性が極めて高いとみられている。⁽²⁴⁾ 上記のような背景から、茶道具類と伴出したドイツ製藍彩炆器片もまた、茶道具類同様、加賀前田家三代利常が在職期間中に入手し、利次に分配された道具であるとみてよいだろう。

（二）柳川藩立花家の伝世作例

柳川藩立花家に伝来したドイツ製塩釉灰色藍彩炆器ジャグ（以降「立花家伝世品」と略称する）はこれまでほとんど知られておらず、わずかに『日蘭関係資料Ⅱ―長崎県文化財調査報告書第180集』⁽²⁵⁾に口絵で紹介されていた作品である。立花家伝世品は高二・八糎、口径四・三糎五・五糎、胴径一五・五糎、底径九・五糎、重一一二〇g、焼き締まった把手付水注である【挿図9】。桐箱の蓋表に墨書「古和蘭陀焼／取水水注」、箱底面に貼紙札墨書「新三號」とある。⁽²⁶⁾ また、頸部は古代ギリシア陶器レキユトスのチューリップ形に開く頸部を模して口縁に向かって開き、把手と相対する正面に獣耳を持ち、舌を出す奇妙な髭面の人物面（恐らくフォーン）を貼付文とする【挿図10】。肩上部には三弁の花弁状の彫文様が展開し、花弁の隙間をハッチングで充填する。胴部中央は八弁の薔薇文を印花で隙間

徳川美術館所蔵ドイツ製塩釉灰色藍彩炆器「印花人物文阿蘭陀焼手付水指」

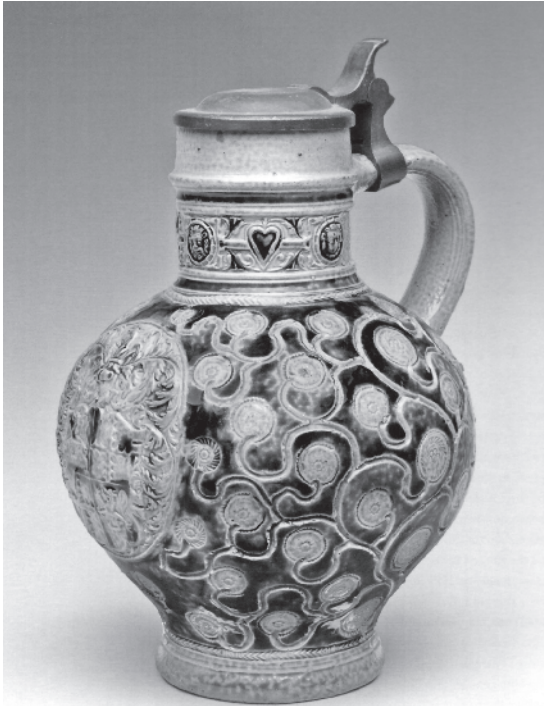


挿図9 柳川藩立花家伝来
塩釉灰色藍彩炆器手付ジャグ
立花家史料館所蔵



挿図10 柳川藩立花家伝来
塩釉灰色藍彩炆器手付ジャグ
人面貼付文部分

なく配し、それらの薔薇を唐草彫文で波打つように繋ぐ。腰下部は蓮弁文、高台側面は縄目文を廻らせる。獸耳人物文、花卉文、薔薇唐草文の余白、蓮弁にコバルト彩（藍彩）を施す。底部は平底で器全面施釉としており、また胴部に熔着痕があることからあるいは何らかの支持材を用いて焼成したのであるかと考える。この立花家伝世品に特徴的な、左右に蛇行する薔薇唐草文はレーレン窯の一五九〇年代から一六二〇年代にかけての製品にみることができる【挿図11】。こうした類品からみて、立花家伝世品もレーレン窯の十六世紀末期から十七世紀前期の製品と考える。製作から遠からぬ時期に舶載されたのであれば、初代立花宗茂（在職…元和六年〔一六二〇〕～寛永十五年〔一六三八〕）、または二代忠茂（在職…寛永十五年～寛文四年〔一六六四〕）の頃に入手したかと想定できるものの、蔵帳ほか文献史料



挿図11 塩釉灰色藍彩炔器ジャグ 大英博物館所蔵
(BM MLA 1855, 12-1, 180, Bernal Collection)

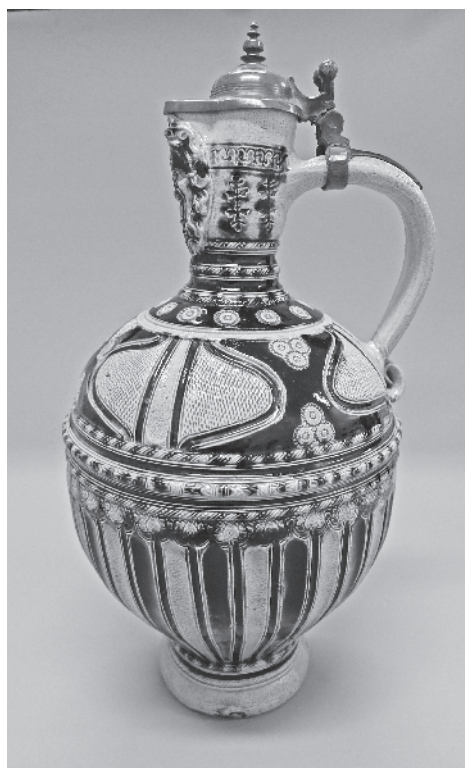
で追うことは難しい。ちなみに立花家伝来品にはもう一点、やや時代が下るかと思われる把手付灰色藍彩炔器ジャグ、および幕末から明治時代初期に舶載されたプリントウェアの皿二枚も残されており、平戸・出島のオランダ商館からの舶載品を手に入れやすい環境にあったことが推測できる。

（三）「堀田相模守より拝領」と伝わる伝世作例

西田一九八七で紹介されたドイツ製塩釉灰色藍彩炔器ジャグ（個人蔵、以下「個人蔵伝世品」）は、総高三六・一糎、口径四・九×六・三糎、胴径一九・二糎、底径九・七糎の大型製品である【挿図12】。頸部がレキユトスの頸部形に開き、正面に人面貼付文を付ける【挿図13】。肩上部は二重丸文を印花で、また幾何学文様を彫文で表現し、文様内の余白をハッチングで充填する。胴下部は蓮弁文を彫文であらわし、コバルト彩（藍彩）を肩部や蓮弁に施す。またヨーロッパで製作・取付けられた金属製の蓋が把手に取り付けられている。この個人蔵伝世品は大きく膨らんだ胴部と口部の開き方、胴下部の蓮弁文と肩部のハッチングなどの造形的特徴から、ヴェスターヴァルトで十七世紀前期に製作された作品とみなしてよい。このジャグに付随する箱の蓋表には「拜領／阿蘭陀焼／ドウビン」墨書、蓋裏に「堀田相模守正亮公／享保十八年十月／七日被為入拜領／真弥」と墨書がある。この箱書を信じれば、老中首座も務めた幕閣・堀田相模守正亮（一七一二～一六二）から拝領の品であるが、「正亮」と実名を記す点、「拜領」に入らせる（傍線筆者）という書札札にない表現である点に不審がある。なお、文献史料からこの享保十八年（一七三三）十月七日、堀田正亮は領地・佐倉にいたと推測される。この作品に関しては、「堀田相模守様から某に下された」という伝来が口伝のようなかたちで付随して伝世し、近代になっ



挿図13 塩釉灰色藍彩炔器ジャグ 人面貼付文部分



挿図12 塩釉灰色藍彩炔器ジャグ 個人蔵

てその旨を盡に墨書したとみるのが妥当と思われる。オランダ東インド会社
社の記録にある「加賀殿」を、老中職も務めた幕閣・堀田「加賀守」正盛
(一六〇九―五二)とみると、正盛―正俊―正武―正亮と堀田家での作品の
伝世を推測することができるが、一方では(一)で考察したように、「加賀」
前田家にも同様にドイツ製藍彩炔器が伝来していたことが明らかになって
いるので、「加賀殿」を特定することは容易ではない。しかし、幕府高官
として堀田正盛がこうした希少な高級舶来品を手に入れた可能性は十分
にあり、この個人蔵伝世品は伝・大名家伝世として今後も検討されるべき
重要な作例といえる。

むすび

ドイツ製炔器を含めたヨーロッパ製陶器が日本へ運ばれた第一のピーク
を一六三〇年代から一六六〇年代におくと、本作品のように十六世紀末期
まで製作年代を上げて考えることができる製品はアンティーク商品の扱い
であったのか、それとも当時のオランダでは製作年代の違いには関係なく
流通していたのであろうか、という疑問が残る。十七世紀前期から中期に
かけてのオランダ絵画に様々なドイツ製炔器が描かれていることはよく知
られているが、描かれた時代と描かれているドイツ製炔器はほぼ同時代で
ある。もしくは、本作品のような製品は舶載のピークに先行してやや早い
時期に日本へ運ばれていたのかもしれない、舶載時期については今後の検討
課題である。また、装飾性の高い大型の塩釉藍彩炔器は、オランダにおい
ても高級陶器であって、富裕な市民階級の間で、これも高級品であった白
ワイン等を注ぐ容器として使われていた。同じドイツ製炔器でも、日本国

内で一定数の出土・伝世例の知られるフレッツヒェン窯製人面貼付文塩釉褐色炔器ジャグ（いわゆる「髭徳利」）が、オランダでも日常的に使用されるビールやオイル、酢等の容器・また飲用器で、さらにオランダ東インド会社ではこれを水銀運搬容器として使用していたことに比べると、高級品であるヴェスターヴァルトやレーレン窯製の塩釉藍彩炔器は、献上品のような役割で日本に運ばれたとみてよい。こうしたことから、これら藍彩炔器は、貴重な舶載品が献上される地位の人物、すなわち徳川將軍や幕閣・大名らにしか渡らなかつた製品であり、舶来のヨーロッパ製陶器「阿蘭陀焼」の中でもほとんど流通しない特別品であつたとみてよい。

さらに、大名家伝世・出土の藍彩炔器の中で、本作品のみタンカード（筒形のビール飲用器）で、ほかはジャグであることも理由は不明であるが、特殊な点であることを指摘したい。本稿の考察によって、本作品は、一五九〇年代にドイツ・ヴェスターヴァルト地方の炔器生産地グレンザウの、ヤン・エメンス・メンニッケン工房で製作され、そこからライン河を上つてオランダの貿易拠点アムステルダムへ運ばれ、さらにオランダ東インド会社の船によって日本へ渡つたものであることが明らかとなつた。その舶載時期は十七世紀前期とみてよい。平戸か出島かいずれかのオランダ商館からどのような経緯で、なぜこのタンカードが尾張徳川家へもたらされたのかは不明であるが、この水指の装飾文様にひとつのヒントがあるかもしれない。本稿ではこれまで貴婦人像貼付文に注目してきたが、このほか胴部に施されたロータス文の印花文を三つ組み合わせた装飾文は、偶然とはいえ、どこか「三ツ葉葵紋」の葵に似ていなくもないのである【図3】。三ツ葉葵紋が徳川將軍家とその一門の紋章ということを知っていたオランダ人が、このロータス文印花文をそれに見立てて、あるいは將軍へ

の献上品のひとつとして日本へ運んだのかもしれないが、これはあくまで推論にすぎない。本稿で確実にいえることは、本作品がオランダ商館から直接尾張徳川家にもたらされた製品とは考えにくく、十七世紀前期に長崎に渡り、將軍家または幕府高官への貴重な献上品としていくつかの手を経たのち、天保十五年（一八四四）までには御三家・尾張徳川家の道具として蔵に納まり、その後、尾張家十二代斉荘が自身の茶の湯道具に拔擢することと新しく価値づけを行つた作品であるということである。

なお、本作品が天保期から嘉永期にかけて名古屋と江戸を移動したという記録がある先述の「御数寄屋方御道具帳」には、ほかに四つの「阿蘭陀」が記載されている。

- 一 阿蘭陀焼御水次 壺／桐箱入白木綿単和巾包／蓋摘手之繫キ上下縁其外所々真鍮／（朱字）明治四未十月 妻木務江被下相成事
- 一 阿蘭陀御水指 壺／桐遠州好箱入宗中書付／白木綿単和巾包／染付細／蓋黒塗 口所之ホツレ損繕有／（朱字）天保十二丑十月 江戸江御差下同月御側差上右御箱書付出来／於江戸御戻之上嘉永元申三月尾州江為御差登／同 四十六番江組入
- 一 阿蘭陀竹輪色絵模様御蓋置 壺／（朱字）天保十二丑八月 新御殿廻り 嘉永三戌八月納／右伺番江組入 合併
- 一 阿蘭陀焼三ツ足梅松模様御燭臺 壺／杉箱入袋付木綿単和巾包／請皿花炊真銀／脚付根獅子／惣目方式百三拾六匁／損繕小疵有／（朱字）天保十二丑八月新御殿廻り／嘉永三戌八月納

このうち「阿蘭陀御水指」については、近代に流出したものの今日も別

所に伝世しており、錫白釉にコバルト彩（藍彩）で幾何学文を描いたオランダ・デルフト製のアルバレッロである。これは在府中の斉荘の下へ運ばれ、「側道具」に管理替えされ、玄々斎（宗中）の箱書も江戸で行った様子が分かる。この種のデルフト製「水指」は舶載の第一次ピークである十七世紀の前期から中期にかけて一定数運ばれてきて茶の湯道具に用いられているが、尾張徳川家においては阿蘭陀渡りの道具は古くからの「名物」道具と肩を並べられる道具ではなく、表に出されることなく長らく蔵で埃を被っていたものであろうか。これも本稿で考察したドイツ製灰色藍彩炔器手付水指と同じく、斉荘と玄々斎が価値づけした道具で、特にこのアルバレッロは玄々斎の箱書を附けることで「斉荘お好みの道具」として強く価値づけされた道具である。ほかデルフト製品の「阿蘭陀」には今日も徳川美術館に残る錫白釉色絵陶器、おそらくもとはナプキンリングである「阿蘭陀御蓋置」がある。このほか、帳によれば某に下げ渡されたと思われる素材不明の「阿蘭陀焼御燭臺」については天保十二年（一八四二）に、当時隠居の身であった十代斉朝の隠居屋敷「新御殿」（名古屋城内）へ移管されたことが分かる。帳からは、天保期の尾張徳川家において当主たちが「阿蘭陀」の道具に目をかけ、側道具、表道具として出蔵させた様子を窺い知ることができる。これは、この十九世紀に、「阿蘭陀」に関する学問や技術一般、また「阿蘭陀」という名のもとに括られたヨーロッパをはじめとした海外の風俗・文物への関心の高まりと重ねることができるであろう。そうした中で、ドイツ製灰色塩釉藍彩炔器「阿蘭陀焼」手付水指は、茶の湯に傾倒し、伝来の古い道具の中から、自分の価値観に沿う道具を選択し直し、玄々斎書付というかたちで評価付けしようと試みた斉荘の眼に、中世以来の唐物に比肩しうる、新しい「唐物」と映っていたのかもしれない。

徳川美術館所蔵ドイツ製塩釉灰色藍彩炔器「印花人物文阿蘭陀焼手付水指」

本稿では尾張徳川家伝来「阿蘭陀焼」手付水指と同種・同時代と思われる、大名家に関係するドイツ製の塩釉藍彩炔器を対象を絞って検討したが、そのほか塩釉褐色炔器ジャグ、いわゆる「髭德利」等をも含んでのより広範囲な舶載ドイツ製炔器出土品・伝世品の受容と流通についての考察は別稿に譲ることとしたい。

註

(1) 「炔器」は ストーンウェア stoneware 「英」を近代日本で翻訳して生まれた用語で、「炔」はその時に作られた字である。欧米と日本での定義分類には乖離があり、近年陶磁用語の定義を見直す動きも生まれている（二〇一七年度東洋陶磁学会全国大会）。本稿では『角川 日本陶磁大辞典』（角川書店、二〇〇二年八月）での定義（七七三頁、執筆 櫻庭美咲氏）に従って、施釉・無釉を問わない、有色胎土、焼成温度一五〇―二〇〇℃のやきものを「炔器」とする。

(2) 「おらんだ」の表記方法は様々あり、「和蘭」「和蘭陀」のほか「おらんど」などもある。また「紅毛焼」「紅毛」と記したものもある。

(3) ファイアンス陶器とは、イタリア・マヨリカ陶器の技術を応用して十六世紀後期から十七世紀にドイツ、フランス、オランダで発達した錫釉陶器を指す。

(4) クリームウェアとは十八世紀中期、イングランドのジョサイア・ウエジウッドが生んだ陶器。胎土に白色粘土とフリットを加え、鉛釉を掛けることで磁器のように白く光沢のある陶器で、磁器の代替品としてプリントウェアの素地に用いられた。

(5) 徳川美術館所蔵品、後述する柳川藩立花家伝来品（二件）、個人蔵の藍彩炔器ジャグの四件である。

(6) 本稿では引用文献については敬称を略し、「姓発行年」で表記する。

(7) 明治五年十二月三日をもってグレゴリオ暦の明治六年一月一日に変更されるまで、和暦（太陰太陽暦）とグレゴリオ暦は対応しない日が存在する。本稿ではCASIO Computer Co. Ltd がオンラインで提供している旧暦変換サービス（<https://keisan.casio.jp/exec/system/1240128137>）二〇一九年一月十四日確

認)を使用した。これによると一六四〇年十二月三十日は、寛永十七年十一月十八日となる。

- (8) フォルカー 一九五四、一二二頁の当該部分は「1640 (前略) December 31th (中略) Lord Cangadome: 18 pieces of stone-baked bowls for the tsia [tea] (中略) Lord Cangadome was the Daimyo of Kaga in whose daimiate afterwards a fine Japanese porcelain was also made (後略)」。「加賀殿」は陶器生産地を治める大名であると記されており、Volker氏は九谷焼の産地である加賀藩を推定している。

- (9) 出土資料から、円筒形の容器類は窯内では複数個ずつ重ねて焼成されたことが分かっている。本作品は口縁部にのみ釉剝離がみられ、底部は無傷であることから、重ね焼きの最上段に伏せて置かれたのではないだろうか。ゲイムスター 一九九七、四六頁を参照のこと。

- (10) 櫻庭 一九九九、一〇七―一〇八頁に尾張徳川家阿蘭陀手付水指について言及があり、この中でも塗蓋と漆の補修から実用に供されたものの指摘がなされている。なお、櫻庭氏の本論文は舶載ドイツ製炔器についてのほとんど唯一のアカデミックな考察であるが、本作品に関する解説部分には道具帳名、およびその伝来について誤りがある。但しこれは恐らく当館から当時誤った曖昧な情報を提供したことに基づくものであろう。

- (11) ^{ヘラルド・ダヴィッド}Gerald David (ネーデルラント、一四五〇/六〇―一五三三)による「カナの婚礼」一五〇―一〇九年頃、油彩、一・〇〇m×一・二八m、ルーヴル美術館(フランス)蔵、Collection of Louis XIV. INV.1995)を例に挙げたい。この作品は主題を聖書時代に採りながらも自身が活躍した同時代のネーデルラントの都市ブルージュ(現在のベルギー西部)の風俗を描いていることが知られている。なおこの作品には大型のドイツ製炔器壺(胴部裾を開き、さらに指で周囲を押した茶褐色の実用器)が酒壺として描かれている。これらの炔器壺は一四七六―一五五〇年頃にドイツのレーレン、ジークブルク、ケルン周辺で製作されたものと同種と思われる。ドイツ製塩釉炔器がネーデルラントへ流通していた様子を伺うことができる資料のひとつである。なおネーデルラントは、現在のベルギー、オランダ、ルクセンブルクのエリアを指す。

- (12) ^{キプリアーノ・ピッコルパッソ}Cipriano Piccolpasso, "Les trois livres de l'art du potier (陶芸三書)", (ed.1860) オリジナルはイタリア・カステルデュランテで一五五六年頃に書かれた、p.27のFig.95 "Grotesques"を参照のこと。グロテスク文は当時の壁面装飾を写した古代的・異教的な装飾文様とされており、十六世紀中期イタリアにおける盛期ルネサンスのマヨリカ陶器装飾に盛んに用いられた。装飾文様については森田義之「マヨリカ陶器」、『世界陶磁全集』第二十二巻 小学館 一九八六年六月(一八四―一八五頁も参照のこと)。

- (13) 「尾張徳川家十二代斉荘と茶の湯」(徳川斉荘公と玄々斎宗室)(展覧会図録) 茶道資料館 二〇〇三年一月)。

- (14) 前掲註(13) 七七―八一頁に詳しい。

- (15) 『和田戸山御成記』(宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵)、宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システムにて二〇一八年十一月三十日陰影本閲覧(<https://shoryobukunachio.go.jp/>)。

- (16) ^{ジャック・ヒントン}佐藤 二〇〇三、八一―八二頁。

- (17) ^{ジャック・ヒントン}Jack Hinton, *The Art of German Stoneware, 1300-1900 from the Charles W. Nichols Collection and the Philadelphia Museum of Art*, Philadelphia Museum and Yale University Press, New Haven and London, 2012, 八―九頁。

- (18) 所蔵先V&Aのキュレーター・^{レイベッカ・ルッファマン}Rebecca Luffman氏の(ウェブ)教示による。このタンカードの製作年代や工房についてe-mailで答えて頂いた(二〇一八年十月二十四日付の私信)。

- (19) ヒント 二〇二二、二二頁。

- (20) 原題は*Memoir ende aenteekeninge van het gepassende dat Willem Janssen in Nangasaqui is gearriveert tot 13 Maert dat met de jonq Zeelandia near Batania is ver trocken anno 1630.* (Collectiesweers van Vliet, Speex ea. Eerste Afdeling No.5). 永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記 第一輯 自一六二七年七月 至一六三〇年十月』岩波書店 一九六九年、三四三頁。

- (21) ゲイムスター 一九九七、一〇二―一〇五頁、およびヒント 二〇二二、七―八頁。

- (22) 「医学部附属病院看護婦宿舍地点発掘調査略報」(『東京大学構内遺跡調査研究

年報1 1996年度』東京大学埋蔵文化財調査室、二〇〇二頁。

(23) 櫻庭一九九、一〇九～一〇頁。

(24) 東京大学埋蔵文化財調査室・富山市教育委員会埋蔵文化財センター作成『江戸富山藩』「出土した茶道具」(執筆・東京大学埋蔵文化財調査室・成瀬晃司 <http://www.city.toyama.toyama.jp/etc/maibun/toyamajyo/edo-toyamahan/top/top.htm> 二〇一八年十一月二十九日閲覧)。

(25) 長崎県教育委員会 二〇〇四年三月。

(26) 立花家史料館主任学芸員・坪内広子氏によれば、立花家の蔵帳には詳細な情報に記載されていないとのことである。

(27) 墨書銘の読解と解釈は原史彦氏よりご教示を受けた。

(28) 「享保」十八年六月十三日はじめて城地にゆくのいとまをたまふ(『新訂寛政重修諸家譜』第十一巻 四頁)、「正亮」の項。

図および挿図 出典

図1 徳川美術館

図2、3、挿図1、2、3、9、10、12、13 筆者撮影
挿図4、5、6 ©Victoria & Albert Museum, London

挿図7 ヒントン二〇一二、二二頁

挿図8 東京大学埋蔵文化財調査室提供

挿図9、10 筆者撮影 ©立花家史料館

挿図11 ヒントン二〇一二、図版一一

謝辞

本稿に関連する作品調査にあたり、西田宏子氏(公益財団法人根津美術館／顧問)、堀内秀樹氏(東京大学埋蔵文化財調査室／准教授)、坪内広子氏(公益財団法人立花財団 立花家史料館／主任学芸員)、Rebecca Luftman氏(Y&A, Ceramics and Glass Division / Assistant Curator)に尽力を頂きました。また尾張徳川家伝来の道具及び帳の理解については四辻秀紀氏(公益財団法人徳川黎明会 徳川美術館／学芸部長)、原史彦氏(公益財団法人徳川黎明会 徳川美術館／学芸部部長代理)に、また史料読解と解釈には原氏、並木昌史氏(公益財団法人徳川黎明会 徳川美術館／学芸員)にご教示頂きました。なお、本稿は二〇一八年度公益財団法人高梨学術奨励基金 特定研究助成「近世日欧「阿蘭陀焼」の基礎研究―出土資料調査集成および国産「阿蘭陀焼」資料の基礎調査」による成果の一部です。ここに記して、各氏及び財団に深謝申し上げます。(徳川美術館 学芸員)

金 鯨 叢 書 第四十六輯 [年一回刊行]

——史学美術史論文集——

平成三十一年 三月 三十日 編集
平成三十一年 三月 三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川 義 崇 誠

発行者

公益財団法人 徳川黎明会
電話(3950)〇一二番(代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一

徳川 林 政 史 研 究 所
電話(3950)〇一二番(代)

〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七

徳川 美 術 館
電話(935)六二六二番(代)

〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町二

印刷所
株式会社 同 朋 舎
電話(361)九二二番(代)